

『西鶴諸国咄』の性格

小 森 啓 助

室に監禁の身となり、自決を迫られるが、承服せず、尼になって男の菩提を申う。

姫は、殿からの厳命によって、「世の定まり事とて、御いたはし頃は候へども、不義あそばし候へば、御最後」と促されたとき、

我命をしむにはあらねども、身の上に不義はなし。人間と生を請けて、女の男只一人持つ事、是作法なり。あの者下々をおもふは、是縁の道なり。おのゝ世の不義といふ事をしらずや。

夫ある女の、外に男を思ひ、または死別れて、後夫を求むること、不義とは申すべし。男なき女の、一生に一人の男を、不義とは申されまじ。又下々を取りあげ、縁をくみし事は、むかしよりためし有り。我すこしも不義にはあらず。その男は、ころすまじき物を。

と抗弁して肯んじない。いうまでもなく、この一章の眼目として、『諸国咄』では必ず引用される個所である。しかし、姫のこの主張

一

『西鶴諸国咄』巻四の二に「忍び扇の長歌」と題する一篇がある。だれにも知られている有名な一章で、紹介の必要はないけれども、こういう話である。上野の花見を終わって帰る、大名の奥方らしい一方のかごのなかに、「和国美人ぞろへにもみえ」ぬくらしい美しい女が乗っている。そのあとをつけているのは、「やうく〜中百姓ぐらゐの風俗、女のすかぬ男」であったが、相手はさる大名の姫と知り、つてを得てその屋敷に奉公する。二年余り勤めるうちにも、姫を慕う心をつのらせていると、「縁は不思議」なもの、姫の方でも「いつともなうおぼしめし入れられ」て、ひそかに扇にしたためた長歌の恋文が届く。手をとって屋敷を出奔しようという誘いであった。裏棚に忍ぶ二人を、屋敷からは大勢の追手が出て探し求めた。半年ののち捕えられて、男は即日成敗されてしまう。姫は一

をもつて、当時としてははなはだ進歩的に、恋愛や結婚の自由を宣言し、貞潔の何であるかを説いて、人間性の解放をうたいあげようとした、作者の新しい思想を代弁するものと考え、この一篇の中心点をここに求めようとする見解に対しては、すでに重友毅氏（『近世文学史の諸問題』所収「西鶴諸国咄二題」）の批判がある。氏は、このような見解は、現代ふうの観点に立った、素朴な鑑賞以外のものではないと評し、一篇の主題は、美女と醜男との不思議な結びつきであった、姫の言説にのみ重点をおくのは本末転倒であるとする。そして、作者が、姫をしてこの主張をなさしめたのは、その行動を非難するのでもなければ、弁護するのでもない、あるがままの人間の姿を容認し、これに深い興味と関心とを寄せているのである、と言われる。

この論に、いまあえて異説をさしはさまうとするのではない。そのとおりだと思ふ。けれども、西鶴の創作意識の推移や、『諸国咄』各章の説話構成などの観点からすると、なおもう少し補足して、考察をめぐらしてみ余地があるのではなからうかと思ふのである。『諸国咄』を問題にするにあたって、はじめに、この一章についてしばらく考えてみたい。

右の話は、そのころ、貴人の間に起こり得たとみられる同種の不義・出奔事件が、素材にとりあげられたものであらうと、重友氏は

推定されている。もちろん、このとおりの事件があったか、なかったか、それはわからない。全くの創作であってもよい。いずれにせよ、「はなしの種」（『諸国咄』序文）は、作者に身近な庶民たちの恋愛や墮落事件ではなく、特殊な社会に生じた、珍しい出来事であったのだ。世人の耳を驚かし、ひいては、さまざまな噂を呼んで尾ひれがついてゆく。人々は自分なりに批判もし、共鳴もしたであろうが、当時の社会情勢からすれば、帰するところは激しい非難攻撃であつたろうことが、容易に想像される。貴人階級・武士階級であるだけに風あたりが強い。西鶴は、こういう事態を前にして、作品の上でこれをどのように処理したかを考えてみたいのであるが、まず、同じ恋愛事件が庶民の間に起こったときはどうか、その方から先にみてゆく。

『好色五人女』がある。巷間に喧伝された五組の男女の恋愛や墮落や姦通は、いずれも当時の道徳規範に触れるものとして、厳しい処刑に付せられるか、あるいはそれに近い状況に追いやられる。西鶴もこれを、やむを得ない天理であるがごとくにみている。けれどもまた、苛酷な定め犠牲にならねばならなかった当事者の恋愛感情そのものは、世間の暖かいまなざしによって支持されている反面が、作者の筆を通して感じられずにはいられない。放火の罪を犯したお七や、身分違いのお夏・清十郎の場合なんかも、決して例外で

はない。暗い陰惨な事件であったはずなのに、意外な明るさが全篇にただよっているように思われるのも、そのゆえであろうか。まして、おせんと樽屋（巻二）のような、素朴な恋愛は、なんの非難も受けるはずがない。極めて肯定的に取り扱われる。

西鶴の筆になるおせんは、潜在的には、人並みの好き心をもった女であつたらしいといへ、そのままやかな働きぶりで主家の信用を得ている女中奉公の身分、相手の樽屋もまた、勤勉実直な職人であつた。ともに、極く身近にありふれた、庶民の典型ともいへべき人物である。二人の橋渡しは、「夫婦池のこさん」という近所の老婆が買つて出る。首尾よく結ばれるまでには、この百戦練磨の老婆の巧妙なかけひきが大きくものをいうわけであるが、これはむしろ、こさんの慾と道づれのいやらしい好奇心のなせるわざであるから、しばらくおく。確認しておかねばならないのは、おせんの奉公先の好意である。第二章で、おせんを想う男があることを聞いた御隠居は、「恋ひ忍ぶ事、世になきならひにはあらず」と、早くも、相手次第ではおせんの縁談に一肌脱ごうとする。そのあと、二人は老婆のはからいで伊勢へぬけ参りにゆくのだが、御隠居の好意は裏切られたことになるのであるにもかかわらず、主家のいきどおりは、一方的に、はからずも同行した手代久七に投げつけられる。おせんはかえって被害者として同情され、やがてこの家から嫁入仕度

をしてもらい、樽屋と正式に結ばれるのである。恋の邪魔者であつた久七が、解雇されてのち、下劣極まるものとされた「蓮葉女」の一人と同棲することになるのは、全く対照的な処遇だつた。

『五人女』ではこのように書かれているが、もちろん作者の脚色であろう。それだけに、おせんと樽屋との恋愛に、作者がどれほど深い思いやりの情を注ぎ、その成立に心からの拍手をおくつていたかが推察されると思う。この種のありふれた市井の恋愛は、西鶴によつて決して道徳的な指弾を受けてはいないばかりか、多分の祝福をさえ与えられている。そしてそれは、いうまでもなく、世人一般の気持をも反映するものにほかならない。でなくては、いくら作者一人が力んでみても、とうてい読者の支持を得ることはできなかったはずである。

一一

『五人女』は、出版の順序からいうと、『諸国咄』のあとに続く。してみると、「忍び扇」の一章と、『五人女』との間に、西鶴の創作意識の上でなんらかの関連がありはしないかと思われてくる。『諸国咄』以前の作品というと、浮世草子では『好色一代男』と『諸艶大鑑』（『好色二代男』）のみであるが、この二作との間の関係も考えてみなければならぬ。

『一代男』や『二代男』の主要な舞台である、遊里の世界にあって、精神的な愛情の結びつきが生じて不自然だという法はない。当然あり得るはなしであるし、実際には珍しくもなんともない、多くの実例があったことがらであろう。けれども、元來遊里という場所、お客と遊女との間の恋愛めいた感情を拒否するのが、そのおきてであったはずだ。いわば一種の「不義」である。このおきてを犯す遊女には、容赦のない虐待や折檻が待ちかまえる。「釜迄啄く心底」（『二代男』巻六の四）や「喰ひさして袖の桶」（『一代男』巻六の一）の例が示すとおりである。あるいはまた、雪の夜、前裁に忍びこみ、縁の下に隠れる屈辱にたえてまで、太夫との逢う瀬を楽しもうとする、五十四歳の「手くだ男」世之介（『一代男』巻七の六「口添へて酒軽籠」）が「老年の恋の姿」らしくないと、阿部次郎氏を嘆かせた（『徳川時代の芸術と社会』）あの話も、無関係ではあるまい。恋愛が公認される場所では決してなかったのだ。『二代男』なんかで、男女の間に真情が通いあう話に、しばしば幻影の出現がつきまとうのも、このためであっただろう。結論だけ簡単にいえば、遊里に出入して大尽などと呼ばれるからには、「遊ぶ」とこの限界を守る、非人間的神経の持主であることが、その資格の一つとして要求されるのではないか。世之介の修行時代の第一の成果は、この資格を得たことであつたと思う。

『西鶴諸国咄』の性格

遊里という恋愛不在の土壌の上に成立した『二代男』や『二代男』は、恋愛不在の作品だといってよい。存在するとしても、それはあくまで、特殊な社会における、特殊な珍しい「事件」というべきである。少なくとも、これらの作品での西鶴の眼は、このようにみていると思う。この段階では、それ以上の進展はあまりしていない。遊里の表裏をくまなく描き出しはいるけれども、この点に關するかぎり、作者はまだ確とした方向を見出し得ないで、足おみをしたまま、一時、廓の門から外へ出てゆく。すなわち『諸国咄』の世界だ。

そのときたまたま耳にしたのが「忍び扇」の一件であつた。武士社会、それも、大名の身边に起こつた事件である。遊里の「事件」とはもとより違つた意味にはあるが、特殊な社会の珍事であることにはかわりがない。美女と醜男との不思議な縁であると否にかかわらずなく、『諸国咄』にはぜひとりあげたい意欲をかきたてられるに十分な出来事である。読者には、わいわいさわざたてる恰好の話題を提供するものだ。西鶴は読者の要望にこたえて、「事件」の経緯を詳細におもしろく報告しなければならぬ。たとえば、いつ、どんな方法で、姫と若者との意中が通じあうのだろうか、そんなことも、読者には興味のもたれることであつただろう。若者は、姫の使いをしてくれたはした女を仲間誤解されぬよう、

口止めに酒を買って与える、窓文は黒骨の扇に書かれた長歌であったなど、庶民的な想定がほほえましい。こんなところに、この一篇の意外なおもしろさが発見できるかと思う。世人の非難攻撃などむしろぬ顔で、読者をはぐらかす。「珍事」をとりあげた目的は、これで十分達成されている。余分のことはいらないはずだが、さてそれだけでは作者の沽券にかかわる、最後に一言なかるべからず、とも思ったような形で、姫君の口を借りた貞操観が付加される。

西鶴はここで何を主張しているのか。もう一度読みかえしてみると、女が一生の間に一人の夫をもつのは至極あたりまえのことで、姦通や再縁とはわけが違ふ、身分の相違といつても、それが縁というものだ、昔から例のないはなしではないではないか、という、ただこれだけのことにすぎない。人権宣言のなんのとは、過大な評価というべきである。いわれてみれば、だれにでも首肯できる。現代感覚からいうのではない。それでもできないほどの、かたくなな庶民のあたまであったとは思えない。ただこの場合、拘束のきびしい姫御前だということは考慮しなければならぬ。もし読者がショックをうけたとすれば、むしろその点であつて、発言者の身分と結びつけてると、いささか破天荒な感じもしようが、発言内容自体は、常識的・通俗的である。中村幸彦氏が、西鶴の浮世草子作家としての中期に、意識して行なわれた時期があるとされる「俗物的な談理」〔近

世小説史の研究〕所収「西鶴の創作意識の推移」の比較的早いあらわれともいえるであろう。庶民の感覚からすれば、一步か半歩先んじてはいたかもしれないが、せいぜいその程度である。姦通と再縁とを同列視したり、前例によりかかったり、どちらかといえば、中途半端なものだ。五歩も十歩も先んじていた、あるいは並外れて進歩的であつたなどと解するのは、買いかぶりというものである。『二代男』以来、もはや常に読者を意識していた西鶴には、はなはだありがた迷惑な買いかぶりであろう。

それにしても、彼は決して、このお説教がしたかったがために「忍び扇」の説話を構えたものではない。ふと筆を休めた瞬間に脳裡をかすめたものであつたかに思われる。目的は「珍しい話」の紹介であつたはずなのに、不覚にも筆がすべってしまった。本来ならば、むしろ勇み足の黒星になるはずのものだった。けれども、幸いなことに、それははしなくも、いままでは特殊な社会の珍しい事件としてしか恋愛をとりあげ得なかつた作者に、一般社会の普遍的な事象としてとらえるきっかけを作つた。考えてみれば、恋愛など、貴族の姫君にもある、極くあたりまえのことではないか。あたまた回転のはやい作家だ。その瞬間、眼ははや新しい題材を追いかけてやまない。

『五人女』も依然として、特殊な珍しい事件を題材とするもので

はあるけれども、「事件」はともかくとして、その原因となった恋愛は、なんの不思議もない、あたりまえのことだ。非難するにはあたらぬ。あたたかい筆致が感じられるのも当然である。なかでも、さきにもた樽屋・おせんの家は、もともと何の変哲もない一夫一婦の物語である。肝心の「事件」は長左衛門との間に発生したのであった。にもかかわらず、作者は、これを忘れたかのように、樽屋との結婚までの経緯に思わぬ長居をしまっている。五章のうち第四章の前半まで続く。挿話であるべきものが主体のようにになっているけれども、必ずしも構想の破綻というべきではなからう。理由は他にもいろいろ考えられようが、一つには、こういう特殊ならざる恋愛の姿そのものが、ここでは、作者の清新な興味の対象であったからではないか。西鶴にしてははじめての題材だ。しかも恋する男女の存在とその正当性は、すでに前作の「忍び扇」で読者の共感を得ているはずである。読者とともに、のびのびと楽しみたい。あとがつかえていることも忘れて、それからそれへと脱線していった。

いくつかの起伏をこえて、二人が無事結ばれ、つましいなかにも愛情に満ちた所帯を営んでいる。その先はいよいよ長左衛門が登場する番であった。ところがどういうはずみか、ここでもまた、作者は一転して、「されば一切の女……」以下のお談義を長々とはい

めるのである。こんなところに作者の意見がなまのままで出てきては、小説の手法として、まことにまずい。が、それはそれで、文学史的な事情もあることだろうから不問に付するとして、このお談義が、必ずしも、その前の部分に密着するものでもなければ、後段の第五章を直接に誘導するものでもない、という点に注意しておきたい。つまり、主題と切っても切り離せないというほどの深い関係がない。あらぬよそごとを考えているように思えて仕方がないのだ。内容は、姫君の所説とは違つて、かなり幅の広い世相観に発展している。これがまた後日の作品に生まれかわってくるものではあるけれども、ここではむしろなくもがなの存在だといつてよい。西鶴では時として、文中の口吻と作者の意中とが、まるっきり逆な場合さえあり得るかと思うが、そこまではいままさしひかえる。「忍び扇」と関連して、談義が作品のなかでどういう位置をしめるかの、一つの例をあげてみたのである。

三

世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ、熊野の奥には湯の中にひれふる魚有り。筑前の国にはひとつをさし荷ひの大蕪有り。豊後の大竹は手桶となり、わかさの国に式百余歳のしるびくにのすめり。近江の国堅田に七尺五寸の大女

房も有り。丹波に一丈式尺のから鮭の宮あり。松前に百間つづきの荒和布有り。阿波の鳴戸に龍女のかけ硯あり。加賀のしら山にえんまわうの巾着もあり。信濃の寢覚の床に浦嶋が火うち筥あり。かまくらに頼朝のこつかひ帖有り。都の嵯峨に四十一迄大振袖の女あり。是をおもふに人はばけもの、世にない物ばなし。

周知の『諸国咄』序文であるが、列挙されされている珍品奇物は、およそ三種類に区分できる。最初から「荒和布」までと、次の四つと、最後の「大振袖の女」と。第一類は、はなはだしく眉つばものではあるけれども、「おのく／＼広き世界を見ぬゆゑ也。」(巻三の六「八疊敷の蓮の葉」と叱られてみれば、さもあろうかと妥協したくもなる。それを認めるなら、これはどうか、というのが第二類。それはいくらなんでも、とはいわせない。第一類中の七つもほぼ漸層的に並んでいるが、第二類と合わせてみると、さらに漸層法の効果ははっきりする。「人を勧誘折伏するに最も効力あるものである。虚の実となり、非理の真理と解せらるゝや、其の言多くは漸層の形を取って現はるゝ。」(五十嵐力氏『新文章法講話』)と修辞学では教えている。西鶴はこの魔術を応用して、強引に「頼朝のこつかひ帖」までを認めさせようとする。その上で「大振袖の女」を出し、結局は「人はばけもの、世にない物ばなし。」と説得してし

まう。修辞法には「飛移法」などというのものもあるが、ここがそれに該当するかどうか。第二類ですでに下世話がかつていて。第一類も多少その傾向がある。「大振袖の女」は、突拍子もないものが、意表をついていきなり出てくるのではない。生臭い現実を読者をひきよせる準備が最初からなされているが、ともかく、同じ珍物であることに距たりはないにせよ、人ほどさまざまなものはないことを、巧みに承認させる序文である。

さて、『諸国咄』の本文である全三十五章の説話も、これを題材の上からみると、ほぼ右序文の三種に準じて分類できるであろう。ただし、怪異に関するものを仮に第二類に、そうでないものは、眉つばであるかないかで、それぞれ、第一類・第三類に相当するものとみることである。どちらにも属しそうなものもあるが、概数では、むしろ第二類が圧倒的に多い。数にとられる必要はないが、現実には遠い方からの順序で、これをA類、眉つばをB類、残りをC類と名づけることとし、まずA類からみてゆくこととする。

ところで、この類に関しては、早く近藤忠義氏の『日本文学原論』中の論考がある。また、同氏の日本古典読本『西鶴』にも、短評が加えられている章が多い。『原論』では、超現実的題材の扱い方によって、この種の説話をさらに四種類に分類し、現実化の方法とその意義を考察されている。怪奇談をそれ自身としてとりあげる

場合でも、怪異性そのものには重きがおかれていないという。一方、片岡良一氏も、これまた古く、その著『井原西鶴』で、やはり四種類に分けて説く。分類の基準や論調はさておき、現実観との関係で論ぜられている点からいえば、両者共通している。

ここに述べることは、これらの論評にも、言い方は異なるものの、あらまし触れられているかとも思うが、さきに「忍び扇」や樽屋・おせんでみたのと同様のことが、各篇を通じて一般的に指摘できるのではないかということである。すなわち、作者が主題として用意した説話を展開してゆくとき、必ずしもそのことのみ全神経を奪われることなく、少なからぬわき見が混入していること、そして、それがこんどは中核になって、次の新しい作品へと発展してゆくのではないかということ、換言すれば、近視眼的に主題を追うのみに終わるのではなくて、広角的・望遠的な触角が働いているということである。「忍び扇」や樽屋・おせんでは、たまたま、談義という形で、主として男女間の倫理が説かれていたのであったが、もちろんそのみにはかぎらない。浮世のくさぐさのことがらが、さまざまの形であらわれてくる。以下、この点に指標を置いて、各説話を具体的に検討してみよう。前記両氏のごとく怪奇談をさらに分類することは、困難を感じるので、分類はしないが、題材などの比較的似かよった話ごとに、ほぼ一まとめに区切り、順序不同にとり

あげる。

「残る物とて金の鍋」(巻二の四)は大和へ通う大阪の木綿買商人が、帰途、仙人に出会う話である。疲れているのに肩を貸してやった好意をねぎらわれて、仙術による酒肴のもてなしにあずかる。美女のかなでる楽の音が興をそえる。「盆も正月も一度に」来たような「よいなぐさみ」をした夢さめてみれば、黄金の小鍋が残されていた。原話は『続奇諧記』の「鸛籠記」であるとの近藤忠義氏の注があるが、中国説話の翻案というものの、奇談を話すかたわら作者の眼の置きどころが切りかえられているようだ。貧しい行商人が「息つぎの水」までやっとたどりついたときのことだというのだから、実はこの話、処世の苦難にあえぐ町人どもに与えられた西鶴の「夢」ではなかったか。「小判は寝姿の夢」(『世間胸算用』巻三の三)などが連想される。続く一章「夢路の風車」(巻二の五)もまた仙境譚であるが、夫に先立たれた苦しい生活や、無理に言い寄った男に、大事な形見の織物と生命とを奪われることが、女商人の口を通して語られる。

「水筋のぬけ道」(巻二の三)は、奈良二月堂若狭井の伝説に結びつけての、都の行商人との仲を雇主の妻女に妨げられて自殺した、若狭の女の怨念とその復讐の話。「鯉のちらし紋」(巻四の七)は、長年飼われてきた女鯉が、飼主が妻を迎えると、主人の留守の夜

に、人間の姿となつて現われ出て、なじみの男を取られた怨み言をのべる、などの話。果ては、この女鯉、飼主の舟に飛び乗つて、口から胎児様のものをはき出し、いけすから姿を消す。嫉妬の恐しさの問題とするものであろう。「身を捨てて油壺」(巻五の六)も同じ伝説物であるが、年老いた後家の生態がとりあげられる。姫路城の於佐賀部狐が、小狐を殺された恨みで、眷属どもにさまざまな悪戯をさせる「狐四天王」(巻一の七)にしても、単に怪異を語るものではなさそうだ。お尋ね者をかくまつたと、同心連中にふみこませるなど、町人の社会生活上の不安に思いをはせているとみても、はなはだしい付会の説とは思われない。

「行末の宝舟」(巻三の五)は、解氷期の危険をおかして諏訪湖を渡り水死したはずの男が、七夕のころ、龍宮の大王の使者となり、美々しく飾りたてた舟に、お供を従えて現われる、かの地のうまいことづくめの話を聞いた里人たちは、先を争つて帰りの舟に乗せてもらうが、哀れや、見る見る浪間に沈んでしまった、という怪談ふうの悲喜劇。しかし、怪異談の不気味さなどは、もはやほとんど感じられない。男はいぶかる人々を前にして誇らしげに語る。

爰元より米もやすし。鳥肴は手どらへにする。女房はより取り、旅芝居の若衆もくる。はやり歌の、よろかしなの雪国をうたひあかして、さむいとも、ひだるいともしらず。正月も盆

も、爰とすこしも違つた事なし。十四日から灯籠も出して、爰と替つた事は、借錢乞といふ者をしらぬ。……此七月は、我はじめての盆なれば、ひとしほ馳走のために、国中の色よき娘、十四より廿五迄、いまだ男を持たぬをすぐりて、大踊のこしらへ、それはくまたあるまじき事也。其用意の買物にまゐつた。ひっかかるのも無理はない。貧しい僻村の人々には、まぶたに描く浮世の夢なのだ。たった一人、出帆まぎわに乗船を思いとどまつた分別者も、「今に命のながく、目安書して、世を渡りけると也。」というのだから、どちらに転んでも、ただでは浮ばれない世の中であつた。

「傘の御託宣」(巻一の四)は、紀州掛作観音の貸傘の一本が、風に乗つて肥後の山奥に飛び、村人の無智から伊勢の神体と化し、けしからぬ御託宣に及ぶという話。勇敢な後家が正体を暴露してしまふのだが、ここでもやはり、奇談の興味が、この「色よき後家」の好色的な冒険心への興味に移動する。

「神鳴の病中」(巻二の七)は、親仁の遺言で、牛は売つても、こればかりは手離すなといわれた伝家の宝刀を、息子兄弟が争つた末、弟が手に入れるが、案に相違して、とるに足らぬ鈍刀であつたことがわかり、母に尋ねたところ、かつて水喧嘩の際、なまくら刀のゆえにかえつて命が助かつて、以来、家宝として伝えた由来を知

る、という話である。末尾に、その水争いのお触れを付加する。前の「御託宣」と似た好色的なお触れだが、一章のなかで主題が分裂している。おそらくは、付属的に扱われている雷の件が本体で、これに遺産相統の醜さを付け加えたのであろうが、本末転倒の形になったものと思う。同じく分裂した例を拾うと、「見せぬ所は女大工」(巻一の二)や「十二人の俄坊主」(巻二の二)がある。前者は、やもりのたたりという怪異談にちなんで、女大工というものの存在する意義に触れる。後者も、最晩の、舟もろとも大蛇に呑みこまれる話をつけたりで、その前の水練の神技の紹介の方が主体のようになっている。そもそも、この種の怪異談プラス現実という構成の章は、概してこの分裂傾向があるのだが、それも要するに、当初作者が話題にしようと考えたことが、作品化される途中で変貌してゆくからではあるまいかと思う。さきの「水筋のぬけ道」なんかもこの傾向がある。

四

以上で、A類すなわち怪奇談に関するものを終わる。引例に洩れた章も少なくないが、容易に同様の解釈を下すことができよう。次は、さきの分類によるB類・C類を検討する順序になるが、もちろん、これらにおいても、期するところは、A類についていったこと

『西鶴諸国咄』の性格

となんらかわりはない。

B類の「眉つばもの」の話は、数はあまり多くない。「不思議のあし音」(巻一の五)・「力なしの大仏」(巻四の六)・「くらしいのもの、それに「男地蔵」(巻二の六)や「恋の出見世」(巻五の二)を加えることができようか。また部分的には、「八畳敷の蓮の葉」(巻三の六)や、A類で例にあげた「十二人の俄坊主」(巻二の二)もある。「不思議のあし音」は、盲人の勘の鋭さを話題とするものだが、冒頭の「唐土の公治長は、諸鳥の声をききわけ、本朝の安部の師泰は、人の五音をきく事を得たまへり。」というのや、この盲人本人が「つねに一節切ふきて、万の調子を聞き給ふに、違ふ事まれなり。」ということから書き起こして、二階にいて、下の道路を通る人の足音で、男女別や職業などを、的確に言いあてる話に発展している。ここでも人間に対する関心がみられよう。「大笑ひ」向きの卑猥な話や、酒樽に銀をつめて、あきめくらの目を避ける「おかた米屋」などが登場する。「力なしの大仏」は、体格の割に力がないことを笑われていた男が、自分の子供を無類の力持ちに育てあげる話を主とし、別に各種の超人的特技の例があがっている。それだけのものではあるけれども、庶民生活の一端にも触れるものと解される。

「男地蔵」や「恋の出見世」をこの類に加えたのは、もし強いて

分類するならば、というにすぎないが、前者には、女児をもつ親の不安がこめられているとみてもよく、また、末尾には「さすが都の大やうなる事、おもひしられける。」とある。その一例という意味であろう。後者も、若い商売人が幸福に浴する話、これらのほかに、少し毛色のかわった「灯挑に朝顔」（巻五の一）がある。同じく、あえて三種類に分類するならば、このなかに入れるより仕方がないが、のちにみられる随筆ふうな作品の先蹤として注目しておきたい。

「灯挑に朝顔」などは別として、いずれも相当な誇張を含み、にわかには信じがたい性質の話ではある。そして、なかには、これを語ること自体に終始する程度のももまじっている。A類にくらべると、どちらかといえば、「わき見」の度合いが低い。しかし、それにしても結局は、この珍談を介して、間接的に人間への興味を喚起するのである。「八畳敷の蓮の葉」にも、序文と同じく珍物の列記があり、龍の天上をみて驚く村人に、見聞の狭さを諭す材料に使われているが、つづいて、信長が楯玉にあがる。「天下を御しりあそばす程の御心入には、ちいさき事」とは、単に眉つばを信ぜよとこのではない。省略されているけれども、当然二の矢がこなければならぬ。人間の本質と社会の実態に対する関心と認識の欠如が問題なのだ。西鶴なりの歴史観をもってすれば、信長の天下が永続

しなかつた原因もここに帰することになる。奇談に埋没してしまうだけに終わらないで、たえず新しい話題を求めてやまない創作意欲をうかがうことができると思う。

次に、C類の現実的な話。A類のような怪奇性もなく、B類のような眉つばでもないものを、仮にこう呼ぶ。「お霜月の作鬘」（巻三の三）は、すでに家業は息子たちに譲っている講仲間の連中が、酒の勢いで聳入りの若い男に加えたいはずが過ぎた、という単純な話であるが、町人社会にはありがちな一面をとらえたものといえよう。「公事は破らずに勝つ」（巻一の一）と「闇の手がた」（巻五の四）は、ともに比事物。のちに『本朝桜陰比事』を物することになる。ただし、「闇の手形」の方には、冒頭「美女は身の敵」とあり、女を連れて他国に逃れようとするのだから、逆に『二代男』の「形見の水鏡」（巻四の二）あたりからの流れもみられる。「銀が落ちてある」（巻五の七）は、巻末祝言の意味をこめた町人出世談だが、一ひねりすれば、『日本永代蔵』の「煎じやう常とはかはる問葉」（巻三の一）ともなる。

残る数篇は、読みものとしてもおもしろい。「蚤の籠めけ」（巻三の一）は、隼人という歴々の浪人の話。ある夜隼人が集団盗賊に見舞われ、手傷を負わせて退散させるが、同じ盗賊が同じ夜に犯した別件のために、濡れ衣をさせられて投獄される。七年もの年月が経

過したころ、同牢の罪人たちが手柄話に花を咲かすのを聞いていると、偶然にも、そのなかにかつての夜盗の一人がいることを知る。隼人は、無実の汚名がそそがれるようその男に懇請し、男もまた、罪のついでと快く承知して牢番に申し出で、事件は解決した。隼人は、武士の名がすたれずにすんだのを喜び、相手の命乞いをしてやる。こういうすがすがしい話である。標題は、牢中の罪人の退屈しのぎの手なぐさみの一つをあてている。そういう挿話にも、隼人の長年の無念さがよくあらわされていて、卑近な興味以上のものを覚えるが、落ちつくところは、隼人の情義兼ね備わった武士道精神であること、いうまでもない。牢中で再び流血の私闘をくりかえすことなく、逆に人の命を救うことになった。「大晦日はあはぬ算用」（巻一の三）が、これまた、むずかしい事件を、武士同士の良識が解決した話。大晦日の金銭に関することから、『胸算用』との関連も別に考えられようが、もう一つ「因果のぬけ穴」（巻三の七）がある。兄の敵討に息子をつれて出かけるが、失敗して、息子に首を落させて一旦逃げのびさせる破目となり、その息子も結局はまた返り討ちにあうという話。上の二篇とは趣が違うが、断るまでもなく、ともに、武家物の執筆と直結する西鶴の姿勢を明示するものだ。

以上の各篇に、最初にとりあげた「忍び扇の長歌」を合わせ、こ

『西鶴諸国咄』の性格

の類のものも、原拠となる話題は、やはり何らかの意味で、珍奇な性格を帯びるものに限られているようである。偶然かどうか、武家社会の「事件」が多い。B類とくらべて、その点では、本質的な差別を設けない方がむしろ自然である。さらに、A類の怪異談と比較してもそうだといえよう。現に右の「因果のぬけ穴」では、最後に、敵討の失敗がみずからのかつての悪業の因果であると、兄なる人のしゃれこうべが語り、読者を一応納得させる。現実的な説話から、逆に怪異談に回帰しているのか、その反対なのか、どちらともいえようが、仮にこの因果話を除いても、一個の珍しい事件として立派に成立する。作者の主観では、おそらく、この三者の間に明確な差異がなかったものと考えられる。「世になき物は郷の刀と化物と人の内証に金銀ぞかし。」「懐硯」巻五の二）とは、西鶴一流の警句であるが、「郷の刀」と「化物」と「人の内証」あるいは「金銀」とを、それぞれ、B類とA類とC類の原話に擬するならば、このことが抵抗なくうけいれられると思う。「世になき」珍しいものであることは、西鶴において、共通していた。序文では、さきにもたように、修辭の技法をとり入れて説得するような形になっている。順序も「懐硯」の場合と同様、B—A—Cである。しかし、B類の次にA類を承諾させ、一転してC類に及ぶ、という形だとしてこれにこだわるのは、あまり意味がないことになる。修辭の

便宜からにすぎない。

けれどもまた、だからといって、なにもかもが全く同列に考えられているとするのも、大ざっぱすぎる。序文は本文の完成後に書かれるとみるのが常識だとすると、やはり「人はばげ物」が結論であるとしなければなるまい。いわば、全篇を書き終わった作者自評のことばだとみてもよい。以後、類似の言い方をも含めて、しばしば愛用される。西鶴がどういふ抱負を懷いてこの作品に筆をとったか、もとより推測の範囲を出ないことだが、最初はまず、先行の説話集にならって、ただし、できるだけ広く、さまざまな怪談・奇談を讀者に提供しよう、という程度だったかもしれない。各地に伝わるもの、あるいは諸書にみえるものに、みずからの作成にかかるとのを加え、これを題材に新しい説話集を作ってみることであったらう。ところが、いざ筆をとろうとすると、たわいない伝説や奇談のくりかえしに満足できるはずがない。思いはおのずから人事・世相の百般にわたる。怪談以上に作者の興味をとらえて離さなかったのが、人間とその社会のもろもろのおもしろさであった。怪談や奇談に匹敵する、いな、それにもまさる怪異的なものだ。まさに「人はばげ物」なのである。狐が化けることや、八疊敷の蓮の葉が、もし不思議な珍しい話であるのならば、武士の道義や、男が女を得たと思う、極くあたりまえの話にも、不思議な珍しさがわいてく

る。作者の囊中にあつたさまざまの話題が、堰を切って噴出した。これがC類の各章を形成する。つまりC類は、『諸国咄』執筆の動機からすれば、もともと副次的な性質の説話であつただろう。A類やB類でちらかせた現実を主題とすることは、後続の作品まで温存しておいてもよかつたはずだが、待ちきれずに出してしまった。結果はこの作品の価値を高めたことになるが、当初の予定には入っていなかつたと思う。武家物・町人物その他は、さらにこれから発展した。

五

『諸国咄』三十五章中、怪異に関するものが約三分の二を占める。各章ごとの構成の上からいうと、怪異を主題としながら、人事・世相を点描するもの、さきには仮に「わき見」と称したが、これが最も多いだろうか。例は多くあげるまでもない。「狐四天王」(巻一の七)など、これにあたる。わき見の対象となるものは、むろん各章一定していない。そのあり場所も、一章のはじめであつたり、終わりであつたり、中ほどであつたりする。点描ではなく、かえつて主題がこれに移動したかに思われるものもある。「行末の宝舟」(巻三の五)などがその例であつた。往々にして、どれが本来の主題で、どれがわき見に属するものなのか、わからなくなってしまう。

主題分裂の章である。しかし、いずれにせよ、わき見は単にわき見に終わらない。これを新しい話題とする作品のちに生まれる萌芽となる。

主題が怪奇ではなくて、いわゆる眉つばものや、現実の珍事である場合も、わき見の意義は全く同様である。この類では、すでにして、武家物・町人物に編入されるべき体を備えたものも多い。しかもなお、一作は一作にとどまらず、つねに新しい発展を約束する意欲が、そこに内蔵されている。「忍び扇の長歌」のような内蔵もあった。「物事正直なる人は、天も見捨てたまはず。」(巻五の七「銀が落してある」)のように、書き出しの教訓的な一句がこれを代表するものもみられる。「大晦日はあはぬ算用」(巻一の三)は、このままの形で武家物に投入されてもさしつかえない「義理」の話である。しかし、町人からみれば、無心状一通で十両もの金子が降って授かるこの浪人は、なんとも羨ましいかぎりだ。いわんや、一日千金の大晦日をよそに、雪見の妻としゃれこんだ果ては、十両の小判が十両にふえて処置に困る。結構な御身分というほかあるまい。「彼は武士のつきあひ、各別ぞかし。」と結ぶ。絶妙の皮肉といえよう。冒頭の、いずこも同じ年の瀬風景と、首尾呼応する。『胸算用』の腹案がこのときすでにできていたであらう。こういう内在のしかたもある。

『西鶴諸国咄』の性格

前節までにみてきたところを要約すれば、右のようなことになるが、まとめと称するには、はなはだ漠然としている。すべての場合を網羅しているともいえない。構成といつたからには、各章の主題とわき見との関係について、もっと体系的な結論が得られねばならなかったであらう。野間光辰氏は、かつて「西鶴の方法」(『西鶴新放』所収)で、西鶴が話の好きな、また巧みな作家であることを言われた。そして最近、本稿半ばに、「西鶴五つの方法」と題する論考が、雑誌「文学」(一九六七年九月号)に発表された。まだその(一)「はなしの方法」が掲載されたばかりで、全貌を明らかにし得ないが、西鶴の創作方法が、全作品にわたり、精細に論じられている。そこにいわれているような式で、いくつかの型が『諸国咄』の説話構成にみられはしまいか、そういうことも、実ははじめに考えていたのであったが、明確な整理ができないままになっていたことを告白しなければならぬ。今後あらためて考え直してみることとし、いまはただ、「わき見」が種々様々な形で話の本題と結びつき、これがちの作品を招来する原動力となっていること、概略の展望で終わることとする。わき見といって悪ければ、連句の付合に似た連想である。素材主義だとも評せられる『諸国咄』を、その単調さから救っているのは、付合の妙味だといえようか。もちろん「諸国咄」にかぎったことではない。西鶴文学のおもしろさの

一つがここに求められると思う。話巧者といわれるゆえんであるう。

次に、もう一つ告白しなければならないのは、目録の各章の下部に掲げる「分類語」(天理図書館編『西鶴』解説篇の用語を借用)についてである。これもはじめ、如上の「わき見」や説話の構成を考える上に、何らかのヒントになるのではなからうかと思ってみたのであったが、結果は、同様、ほとんど徒勞に帰した。

分類語は、本文との関係で、三つくらいに型に分けられる。第一は、「大晦日はあはぬ算用」の「義理」や「忍び扇の長歌」の「恋」など、その章の主題を表現するようなもの。「公事は破らずに勝つ」(巻一の二)の「智恵」・「蚤の籠ぬけ」(巻三の一)の「武勇」・「因果のぬけ穴」(巻三の七)の「敵打」・「銀が落してある」(巻五の七)の「正直」などもこの類である。怪奇談で、「仙人」や「天狗」あるいは「幽霊」といった、怪奇自体を標示するものもある。なかには、「狐四天王」(巻一の七)の「恨」のような、狐の恨みなのか、文中、かくし男があるとして、丸坊主にされた女房の「年月の恨」なのか、出所のはっきりしないものもあり、型に分けるとなると、これも、どっちつかずのものがあるけれども、やや広義に解するならば、この類がおおよそ半数に達しよう。

第二は、「神鳴の病中」(巻二の七)の類。一章の主題が二つに分

かれているが、標題の「神鳴の病中」が本来の主題と思われるものの題目であるとすれば、分類語の「欲心」は付随的な話の題目になっている。「十二人の俄坊主」(巻二の二)、「水筋のぬけ道」(巻二の三)も、同じく、怪奇談に現実が付加されていて、標題は怪奇の側に、分類語「遊興」・「報」は現実の側に関係する。「見せぬ所は女大工」(巻一の二)(分類語「不思議」)はその逆であるが。

第三は、「雲中の腕おし」(巻一の六)の「長生」や「八疊敷の蓮葉」(巻三の六)の「名僧」のように、話の主題からずれているもの。前者については、義経主従の人物評を開陳する常陸坊海尊らの「生き長らえた姿を描くことが主眼であった」とみる説(『国文学論叢』第六輯『近世小説・研究と資料』所収、提精二氏「近年諸国咄」の成立過程)もあり、後者についても、必ずしもそうではないともいえようが、少なくとも、第一・第二の流儀からすれば、もっと適切な、核心に触れた語が掲げられて当然だと思おう。「傘の御託宣」(巻一の四)には「慈悲」(原「慈悲」とある。問題の傘が、もと、「慈悲の世の中とて、諸人のために、よき事」と用意された観音の貸傘であったところから、この分類語が出ているらしい。それとも、御託宣におびえる村の危難を救ったのが、「若い人達の身替に立つべし」と決意した後家の慈悲心だというのが、かもしれない。その方が解釈としてはおもしろい。もしそうならば、この章

は第二の型に加えられる。

大体この三つの型がみられるが、もし分類語が、作者の意中の何かを暗示するものではないかとの期待をもつならば、これに僅かでもこたえてくれそうなのは、第二の型である。しかし、遺憾ながら、この型は例が少ない。それも、主題が分裂している傾向の章に限られる。分類語はその一方を担う標題であるといってしまう、せつかくの望みも消えてしまう。まして、他の章にもっとこまかく織りこまれた、それとないわき見とは、分類語はかかわりをもたない。ひそかに期待したのはそこだったけれども、のみならず、なかには、たとえば前出「不思議」のごとく、他の多くの章にあてても一向にさしつかえないものもある。また、本文とどういう関係にあるのか理解したい例もある。所詮、目録の趣向のために副題ふうに掲げたとみる以外、特別の意義は見出しがたいものとしなければならぬだろう。

が、偶然でなければ、こういう程度のごとは、あるいはいえるかもしれない。前にC類としてあげた現実的な話八篇のうち、七篇までが、分類語では第一の型に属する章であることだ。残る一篇「闇の手がた」（巻五の四）も、分類語は「横道」だから、かなりこれに近い。C類は、前にもいったように、その大多数が、のちの武家物その他に繰り入れられてもよいさまをなしている。『諸国咄』の

『西鶴諸国咄』の性格

出発点が怪奇談であることは否定できないと思うが、そこからは最も遠い距離にある章である。わき見ということをもしいうならば、一章全体がそうだといってもよい。力のこもった作品というべきものが多。これに、A類の怪奇談のうちから、現実付加の度の高い、そして、その現実の部分进行分类語が担当する章の二三を加えるならば、読みごたえのある話は、ほとんどそのなかに含まれると思う。

『西鶴諸国咄』という書名は、時を同じくして刊行された『宗祇諸国物語』に対抗して版元が「西鶴」の名を冠したものであると推定されている。果してそうならば、書名だけではなくて、作品の完成期日についても、版元の強い要請があったのではないか。西鶴はおそらく執筆をせきたてられたのであろう。右の数篇など比較的少数の章を除いては、やつつけ仕事の感が深い。一章の長さも一般に短いし、文章も、平易なのは結構だが、筋を運ぶに急で、精彩に乏しい。手持ちの材料が、十分な燃焼をへないで投げ出されたうらみが多い。作者にしては、多くの不満を残す作品となった。直系「懐唄」は、この不満にこたえるものであっただろう。格段の差がある。傍系諸作への展開については、もう駄弁のくりかえしを要しない。すでにその「見取図」（重友数氏、前掲書）ができているのである。各章の原拠となったと考えられる説話や記録は、多くの論

『西鶴諸国咄』の性格

考で指摘されている。それらを駆使して新しい話を構成した西鶴は、浮世草子作家としての眼と腕を磨く場をここに求め得たというべきであろうか。『一代男』から数えて「第三」作、「転」を専らとすべき運命づけられた『諸国咄』であった。(一九六七・九・三〇)